

2 運転事故に関する事項

2.1 鉄軌道における運転事故の発生状況等

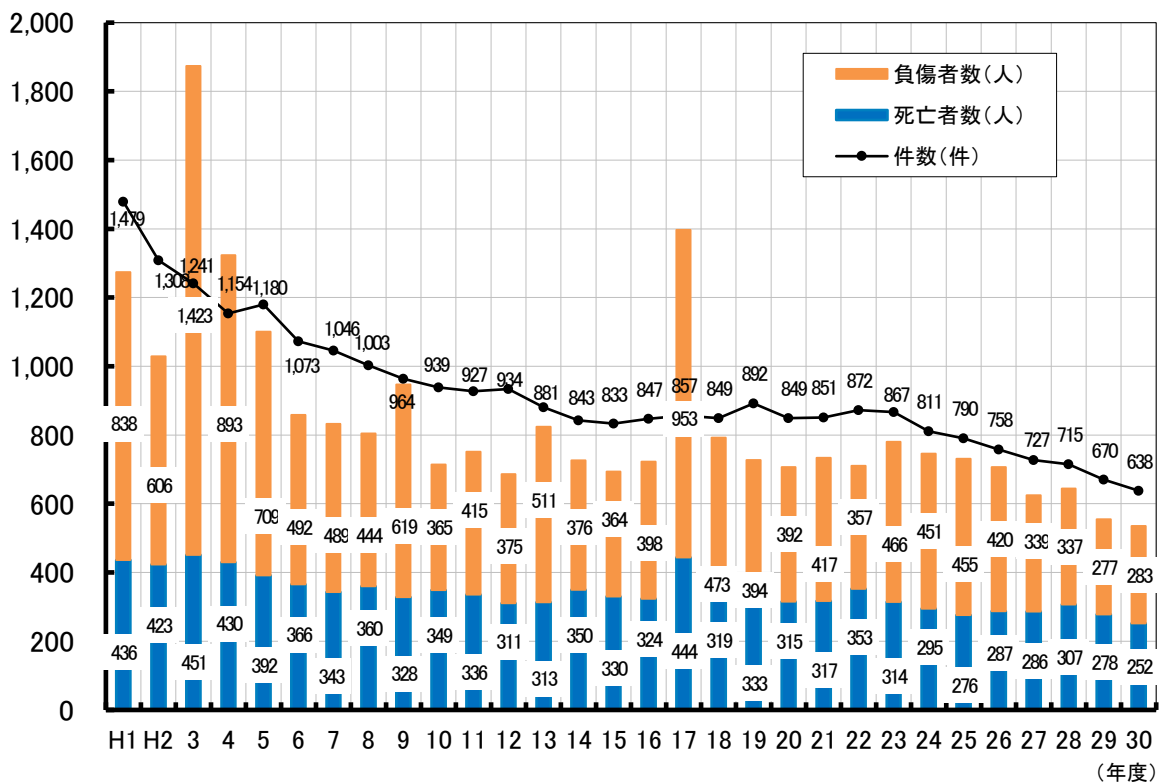
(1) 運転事故の件数及び死傷者数の推移

○運転事故の件数⁷は、長期的には減少傾向にあり、平成25年度から700件台で推移していましたが、平成30年度は638件(対前年度比32件減)でした。

○平成30年度に発生した運転事故による死傷者数⁸は、535人(対前年度比20人減)でした。運転事故による死傷者数は運転事故件数と同様、長期的には減少傾向にありますが、JR西日本福知山線列車脱線事故が発生した平成17年度の死傷者数が1,397人であるなど、甚大な人的被害を生じた運転事故が発生した年度では死傷者数が多くなっています。

○なお、平成30年度に発生した運転事故による死亡者数⁸は、252人(対前年度比26人減)でした。

図5： 運転事故の件数及び死傷者数の推移



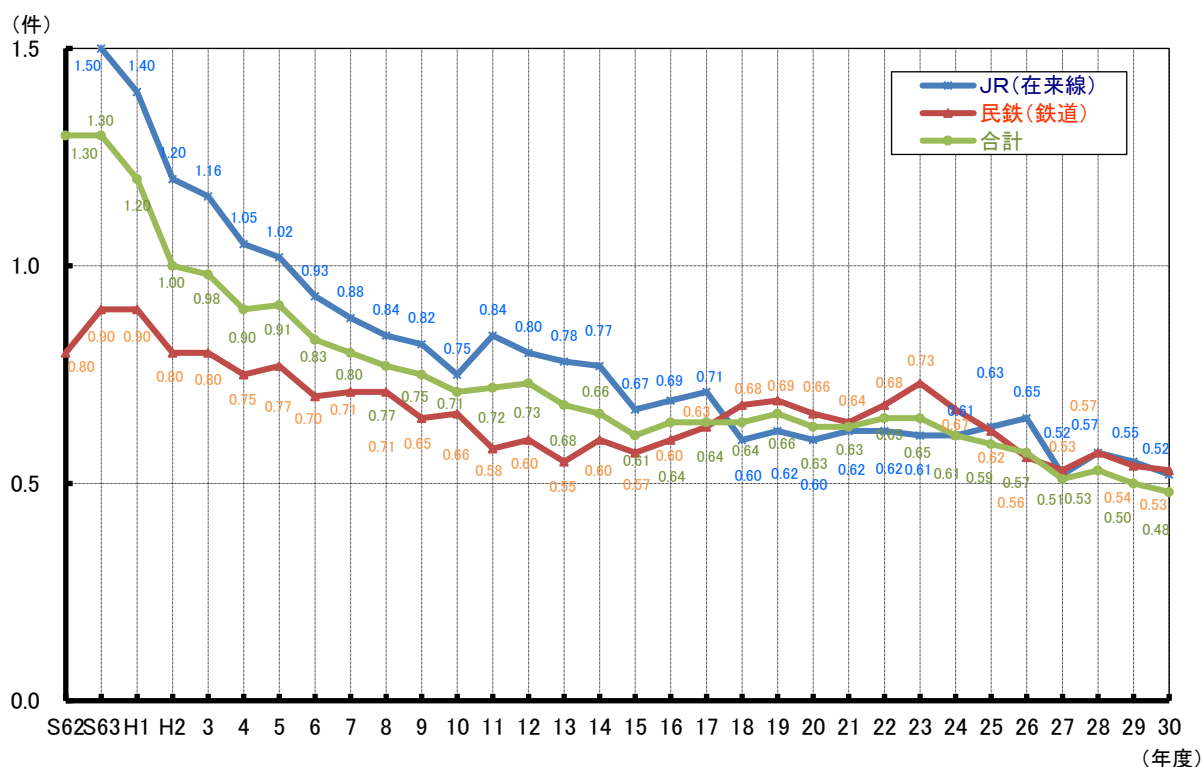
⁷ 自殺を起因とする事象については、運転事故に該当しません。ただし、自殺と断定できないものについては、運転事故としています。

⁸ 自殺行為に直接的に巻き込まれたことにより第三者が死傷した場合についても、同様の扱いとしています。

(2) 列車走行百万キロ当たりの運転事故の件数の推移

○列車走行百万キロ当たりの運転事故の件数は、運転事故の件数と同様に長期的には減少傾向にあり、平成25年度から平成29年度までは0.5件台で推移していましたが、平成30年度は0.48件でした。

図6：列車走行百万キロ当たりの運転事故の件数の推移



※ グラフ中の「合計」は、JR(在来線+新幹線)と民鉄等(鉄道+軌道)の合計です。

(3) 運転事故の種類別の件数及び死傷者数

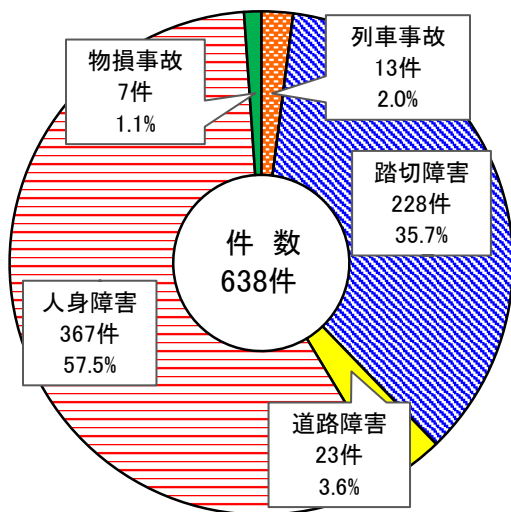
- 平成30年度に発生した運転事故の件数は、(1)に記述したとおり638件であり、その内訳は、線路内やホーム上での列車との接触などの人身障害事故が367件(運転事故に占める割合57.5%、対前年度比1件減)、踏切道における列車と自動車との衝突などの踏切障害事故が228件(同35.7%、同21件減)、路面電車と自動車等が道路上で接触するなどの道路障害事故が23件(同3.6%、同9件減)、列車事故は13件(同2.0%、同増減無し)、物損事故は7件(同1.1%、同1件減)でした。
- 平成30年度に発生した運転事故のうち、身体障害者が関わる事故の件数は4件(対前年度比1件減)であり、人身障害事故3件(いずれも視覚障害者が関わる事故)、踏切障害事故1件(肢体不自由の方が関わる事故)でした。
- また、新幹線に関わる運転事故の件数は2件⁹⁾(対前年度比2件増)であり、いずれも人身傷害事故でした。
- 平成30年度に発生した運転事故による死傷者数は、(1)に記述したとおり535人であり、その内訳は、人身障害事故によるものが374人(運転事故に占める割合69.9%、対前年度比3人増)、踏切障害事故によるものが149人(同27.9%、同19人減)、道路障害事故によるものが10人(同1.9%、同増減無し)、列車事故によるものが2人(同0.4%、同4人減)でした。
- なお、平成30年度に発生した運転事故による死亡者数は、(1)に記述したとおり252人であり、その内訳は、人身障害事故によるものが162人(運転事故に占める割合64.3%、対前年度比5人減)、踏切障害事故によるものが89人(同35.3%、同22人減)、道路障害事故によるものが1人(同0.4%、同1人増)、列車事故によるものが0人(同0%、同増減無し)でした。

⁹⁾ 新幹線に関わる運転事故は下記の2件です。

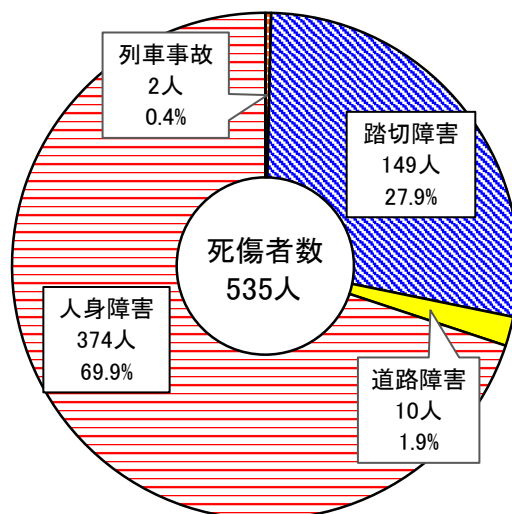
- ・ JR東日本の東北新幹線において、ホーム上にいた旅客が列車通過時の飛翔石が衝撃し、負傷(1人)した。(平成30年7月30日)
- ・ JR東海の東海道新幹線において、ホーム上にいた旅客が立ち眩みにより転倒したことにより、進入してきた列車側面に接触し、負傷(1人)した。(平成30年8月18日)

図7： 運転事故の種類別の件数及び死傷者数(平成30年度)

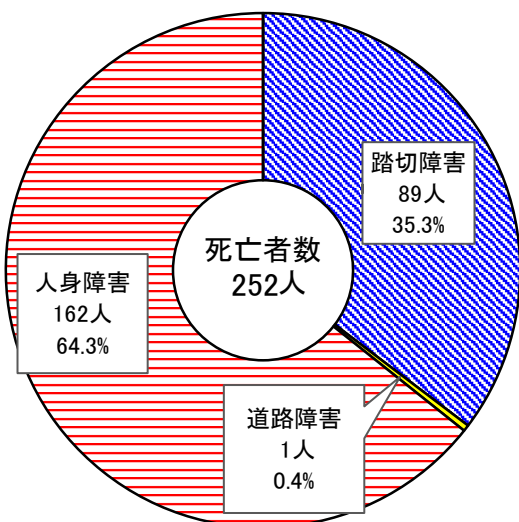
① 件数



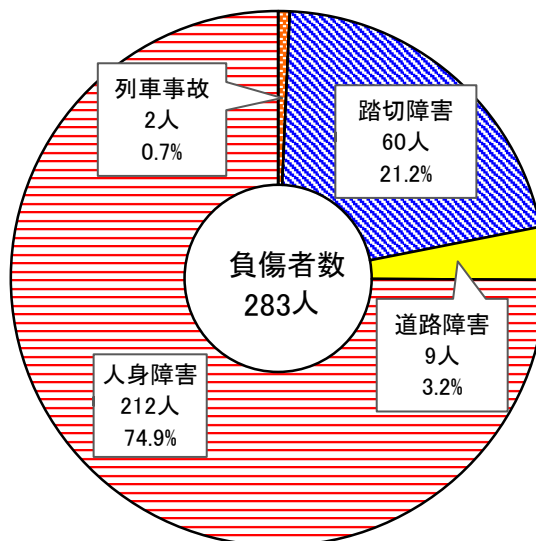
② 死傷者数



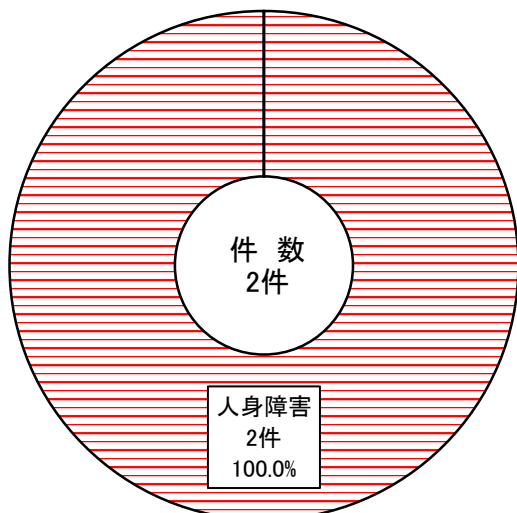
③ 死亡者数



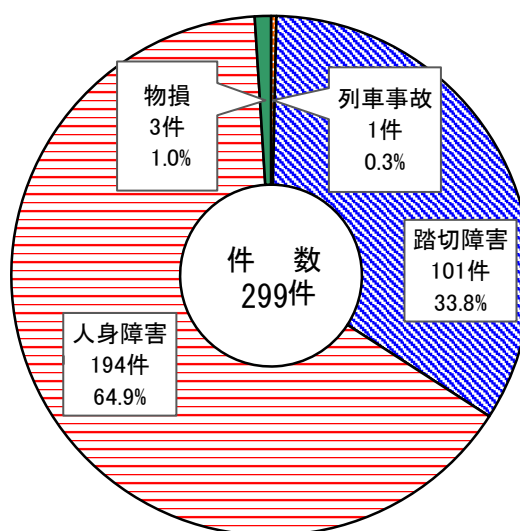
④ 負傷者数



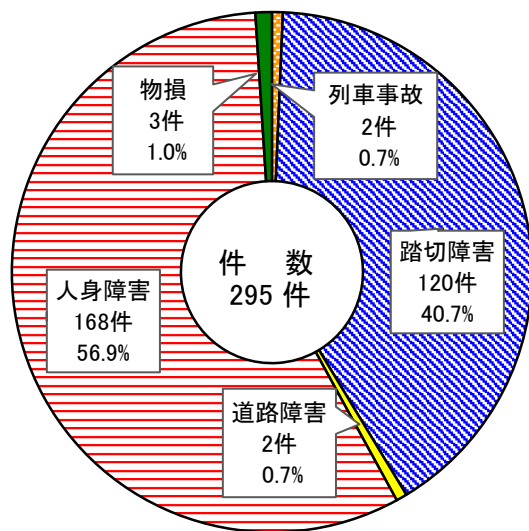
⑤ JR(新幹線)の件数



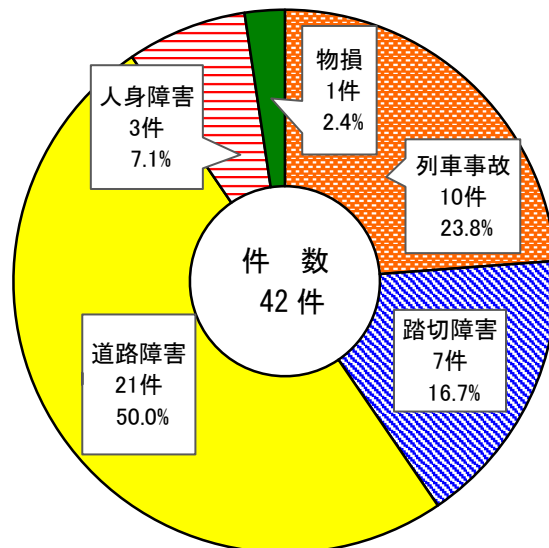
⑥ JR(在来線)の件数



⑦ 民鉄等(軌道以外)の件数



⑧ 民鉄等(軌道)の件数



(4) 平成30年度において5人以上の死傷者又は乗客、乗務員に死亡者が発生した事故

○平成30年度は該当する事故がありませんでした。

2.2 列車事故の発生状況

- 平成30年度に発生した列車事故の件数は、運転事故全体の2.0%に当たる13件(対前年度比増減無し)であり、その内訳は列車衝突事故が4件(列車事故に占める割合30.8%、対前年度比1件増)、列車脱線事故が9件(同69.2%、同1件減)、列車火災事故が0件(同0%、同増減無し)でした。
- 平成30年度に発生した列車事故による死傷者数は2人(運転事故に占める割合0.4%、対前年度比4人減)であり、その内訳は列車衝突事故によるものが2人(列車事故に占める割合100%、対前年度比2人増)、列車脱線事故によるものが0人(同0%、同6人減)、列車火災事故によるものは0人(同0%、同増減無し)でした。
- なお、平成30年度に発生した列車事故による死者数は0人(運転事故に占める割合0%、対前年度比増減無し)でした。

図8：列車事故の件数及び死傷者数の推移

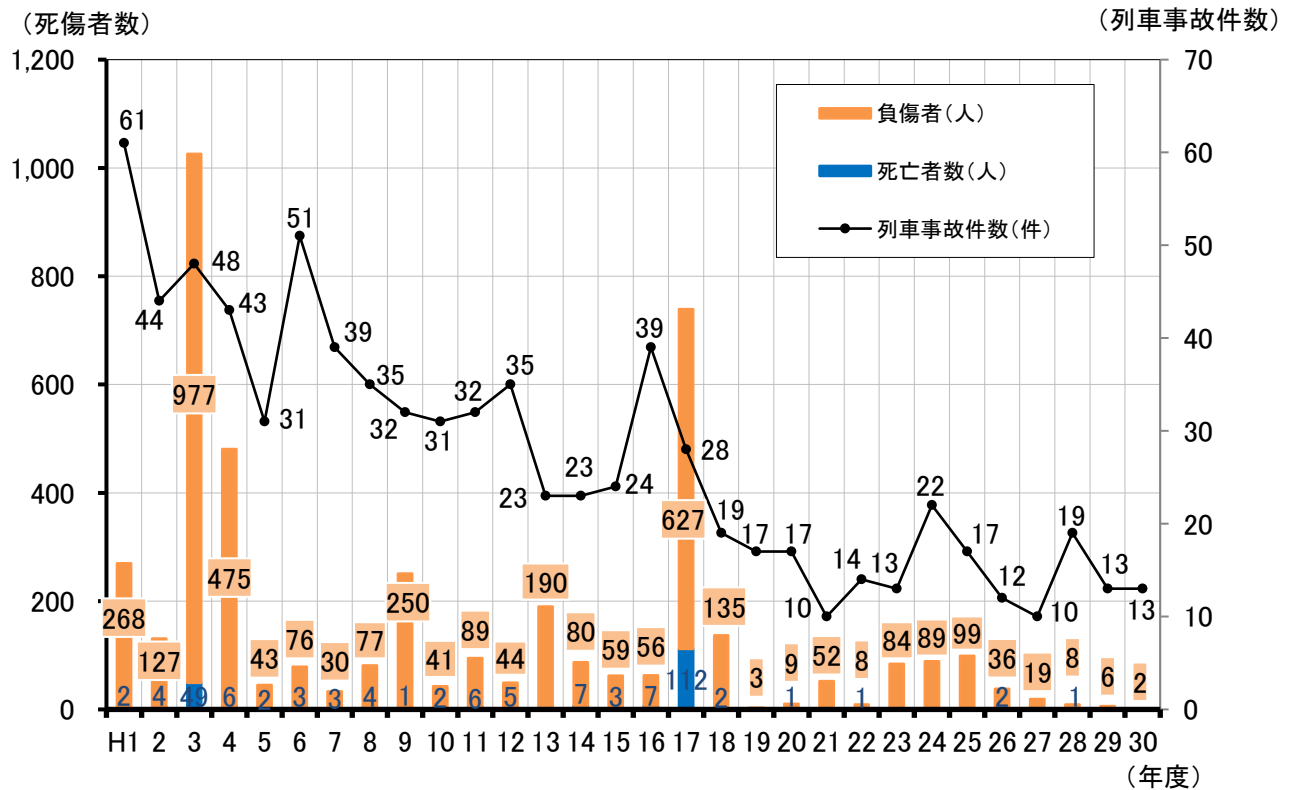
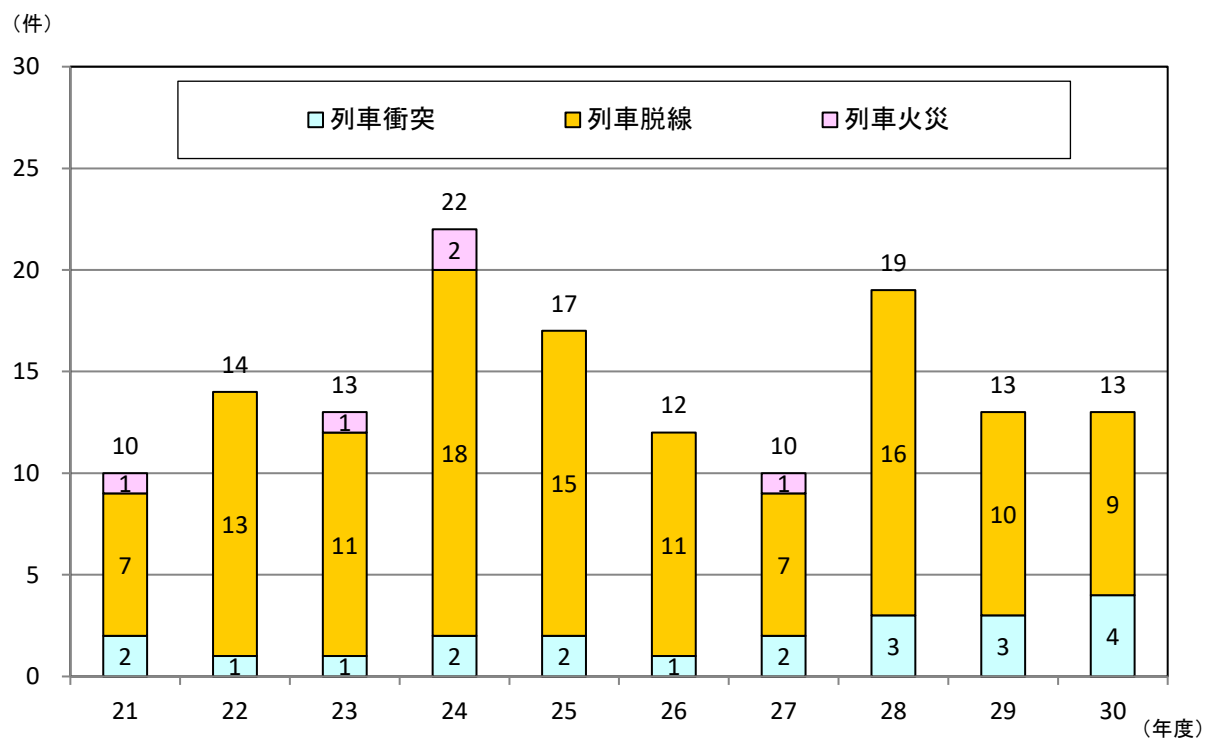


図9：列車事故の件数の内訳(過去10年間)



2.3 踏切事故の発生状況

(1) 踏切事故の件数及び死傷者数の推移等

○平成30年度に発生した踏切事故の件数は、運転事故全体の35.7%に当たる228件（対前年度比22件減）でした。

○平成30年度に発生した踏切事故のうち、身体障害者が関わる事故の件数は1件（踏切事故に占める割合0.4%、対前年度比増減無し）であり、第1種踏切道における肢体不自由の方が関わる事故でした。

○平成30年度に発生した踏切事故による死傷者数は149人（運転事故に占める割合27.9%、対前年度比20人減）であり、うち死者数は89人（同35.3%、同22人減）でした。

図10：踏切事故の件数及び死傷者数の推移

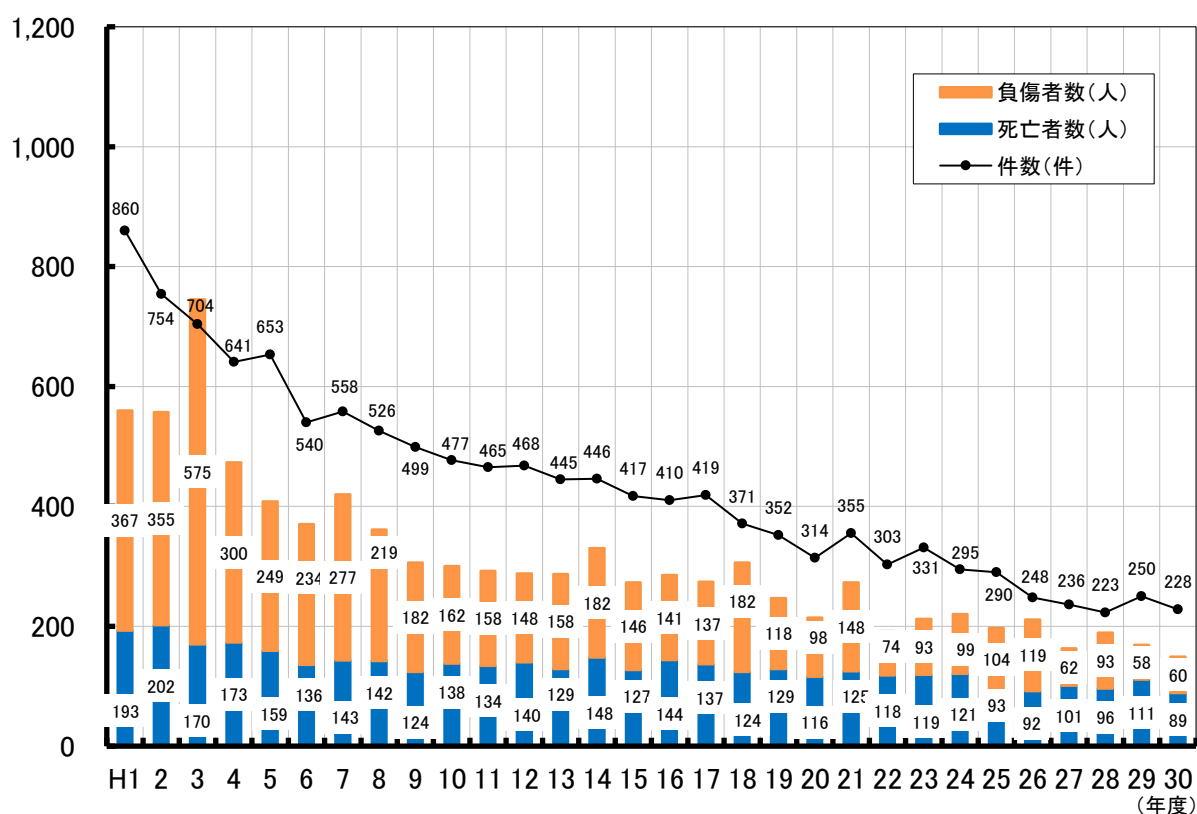
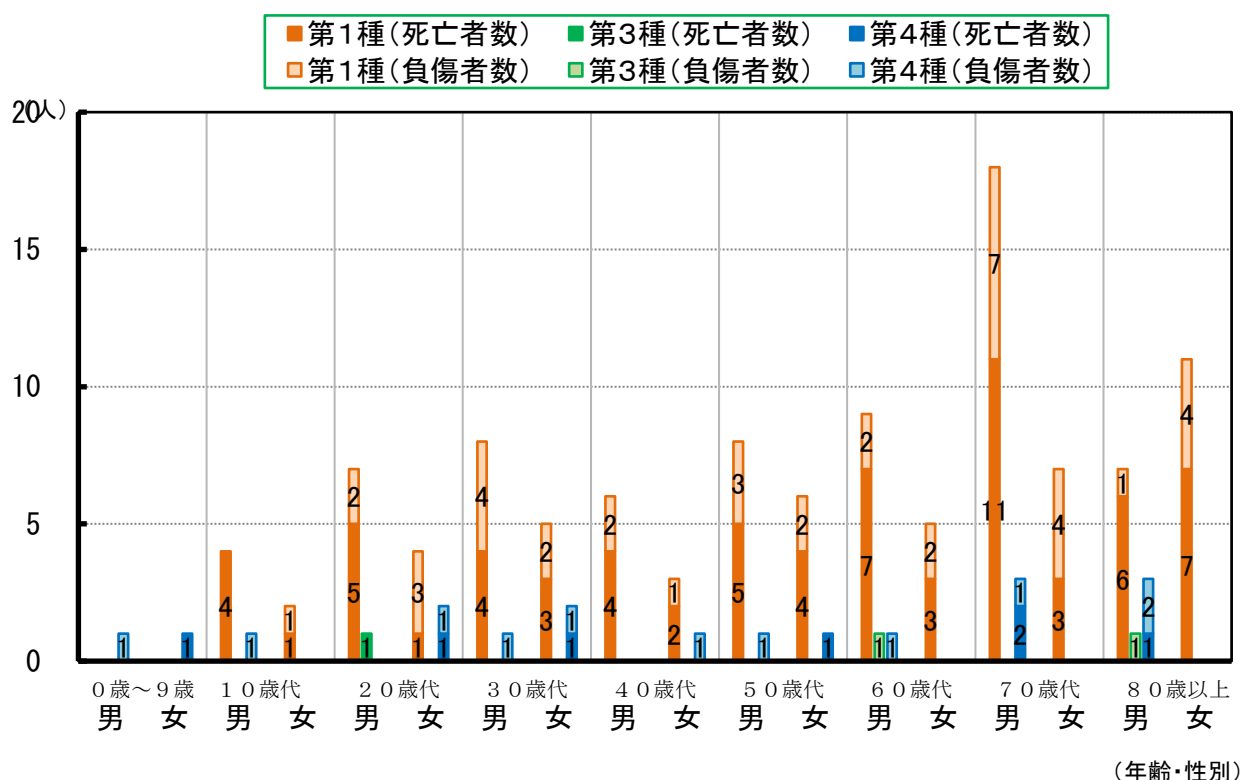


図11:踏切事故による死傷者数の年齢別人数(平成30年度)



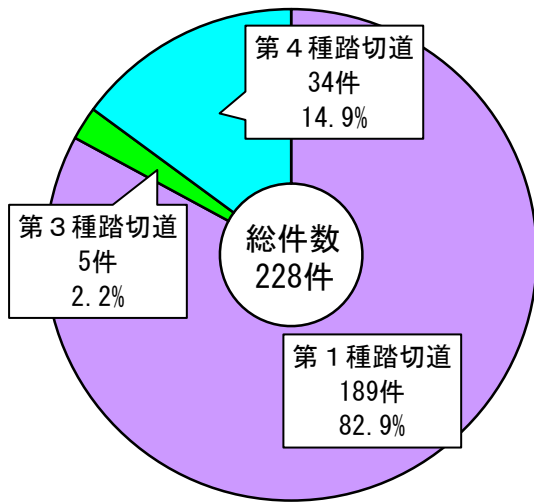
※ 高齢者(65歳以上)が関わる踏切事故の内訳は、「第1種踏切道における死傷者数は50人、うち死亡者数は31人」、「第3種踏切道における死傷者数は2人、うち死亡者数は0人」、「第4種踏切道における死傷者数は6人、うち死亡者数は3人」です。

(2) 踏切種別別・衝撃物別及び原因別の踏切事故の件数

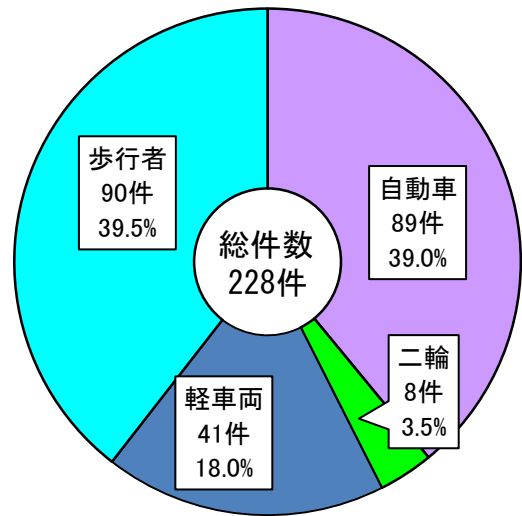
- 平成30年度に発生した踏切事故の踏切種別別の内訳は、第1種踏切道189件(踏切事故に占める割合82.9%、対前年度比32件減)、第3種踏切道5件(同2.2%、同1件増)、第4種踏切道34件(同14.9%、同9件増)でした。
- 衝撃物別の内訳は、自動車89件(踏切事故に占める割合39.0%、対前年度比3件増)、二輪8件(同3.5%、同7件減)、自転車などの軽車両41件(同18.0%、同3件増)、歩行者90件(同39.5%、同21件減)でした。
- 原因別の内訳は、直前横断130件(踏切事故に占める割合57.0%、同9件減)、落輪・エンスト・停滞53件(同23.2%、同23件減)、側面衝撃・限界支障29件(同12.7%、同1件増)、その他16件(同7.0%、同9件増)でした。

図12：踏切種別別、衝撃物別、原因別及び関係者年齢別の踏切事故の件数(平成30年度)

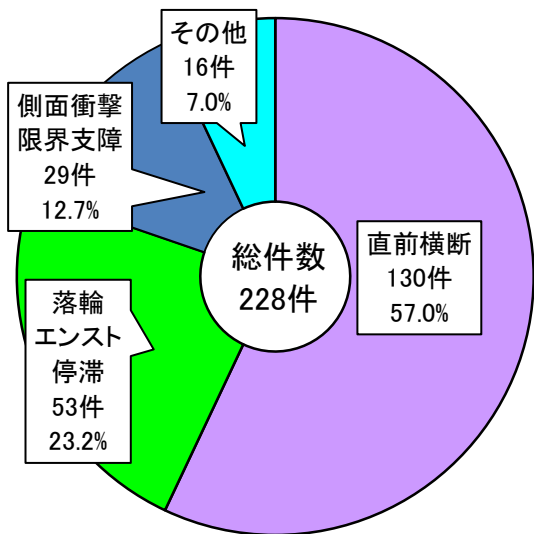
① 踏切種別別



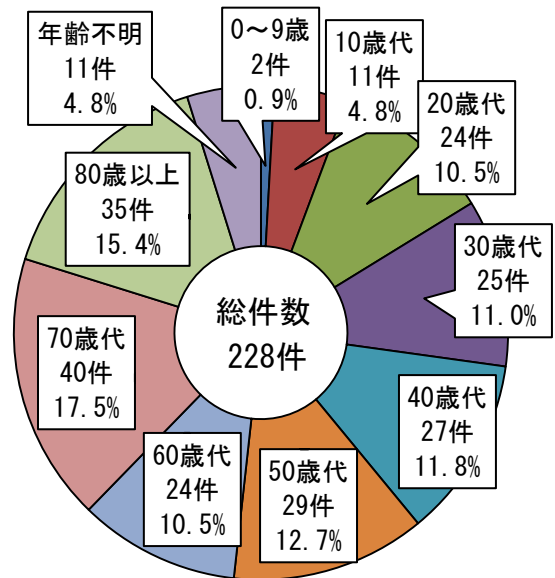
② 衝撃物別



③ 原因別



④ 関係者年齢別



※高齢者(65歳以上)の件数は、84件

直 前 横 断：踏切道において、列車又は車両(以下「列車等」という。)が接近しているにもかかわらず、踏切道を通行しようとする自動車、二輪・原動付自転車又は軽車両若しくは人が、無理に又は不注意に踏切道内に進入したため列車等と衝突したもの

落輪・エンスト・停滞：自動車等が落輪、エンスト、交通渋滞、自動車の運転操作の誤り等により、踏切道から進退が不可能となったため列車等と衝突したもの

側面衝撃・限界支障：自動車等が通過中の列車等の側面に衝突したもの及び自動車等が列車等と接触する限界を誤って支障し停止していたため列車等が接触したもの

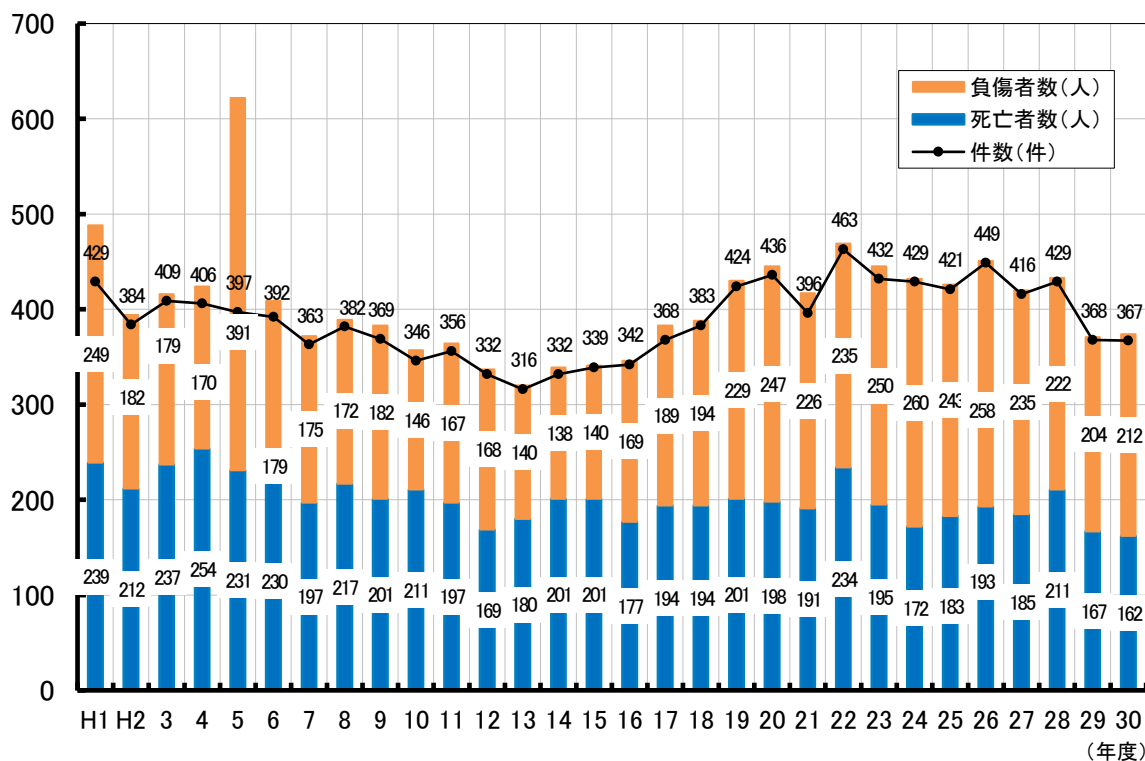
関 係 者 年 齢：関係者年齢とは、歩行者等の年齢(自動車にあつては、運転者の年齢)

2.4 人身障害事故の発生状況

(1) 人身障害事故の件数及び死傷者数の推移等

- 平成30年度に発生した人身障害事故の件数は、運転事故全体の57.5%に当たる367件(対前年度比1件減)でした。
- 平成30年度に発生した人身障害事故のうち、身体障害者が関わる事故の件数は3件(人身障害事故に占める割合0.8%、対前年度比1件減)であり、いずれも視覚障害者が関わる事故でした。
- また、新幹線に関わる人身障害事故の件数は2件(人身障害事故に占める割合0.5%、対前年度比2件増)でした。
- なお、平成30年度に発生した人身障害事故による死傷者数は374人(運転事故に占める割合69.9%、対前年度比3人増)、うち死亡者数は162人(同64.3%、同5人減)でした。

図13： 人身障害事故の件数及び死傷者数の推移



(2) 原因別の人身障害事故の件数等

○原因別の内訳は、次のとおりです。

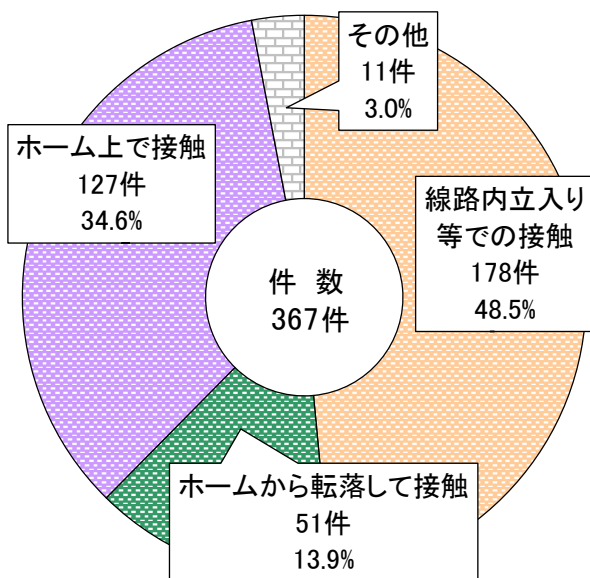
- ・「公衆等が無断で線路内に立ち入る等により列車等と接触したもの(線路内立入り等での接触)」が178件(人身障害事故に占める割合48.5%、対前年度比10件減)であり、これによる死傷者数は180人(同48.1%、同9人減)、うち死亡者数は133人(同82.1%、同2人減)でした。
- ・「旅客がプラットホームから転落したことにより列車等と接触したもの(ホームから転落して接触)」が51件(同13.9%、同3件増)、これによる死傷者数は53人(同14.2%、同5人増)、うち死亡者数は23人(同14.2%、同2人増)でした。
- ・「プラットホーム上で列車等と接触したもの(ホーム上で接触)」が127件(同34.6%、同1件減)、これによる死傷者数は127人(同34.0%、同3人減)、うち死亡者数は6人(同3.7%、同3人減)でした。

○平成30年度に発生した人身障害事故のうち、身体障害者が関わる事故の原因別の内訳は、「旅客がプラットホームから転落したことにより列車等と接触したもの(ホームから転落して接触)」が3件であり、これによる死傷者数は3人、うち死亡者数は3人でした。なお、いずれの事故も視覚障害者が関わる事故でした。

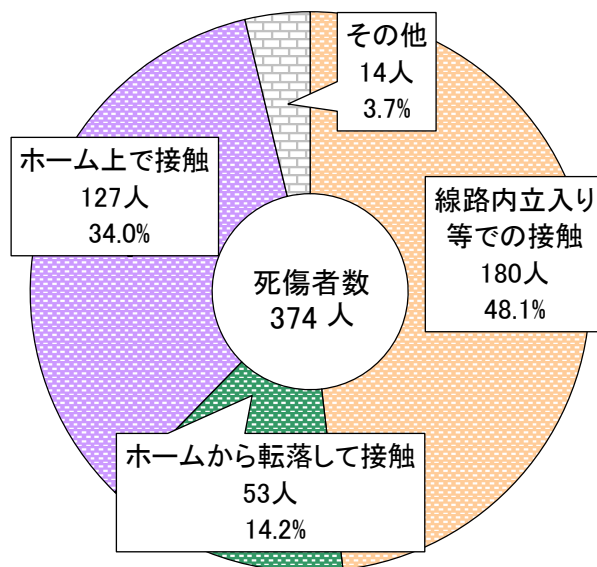
○その他、鉄道係員の作業誤り等によるものは11件(人身障害事故に占める割合3.0%、対前年度比7件増)、これによる死傷者数は14人(同3.7%、同10人増)、うち死亡者数は0人(同0%、同2人減)でした。

図14：人身障害事故の原因別の件数及び死傷者数(平成30年度)

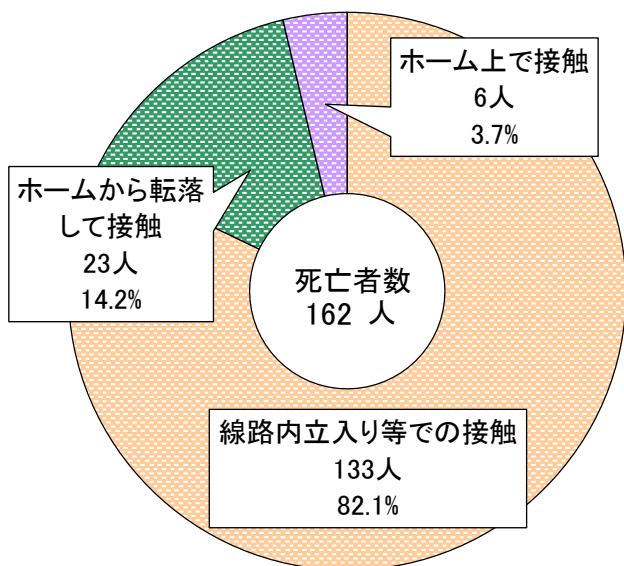
① 件数



② 死傷者数



③ 死亡者数



④ 負傷者数

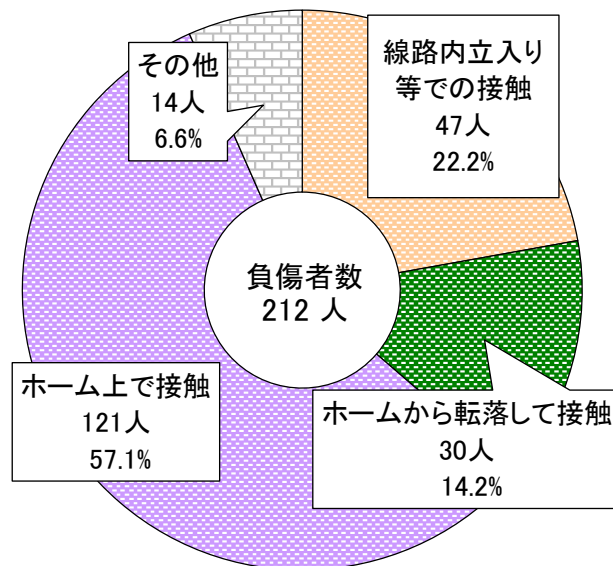


図15: 人身障害事故の原因別件数の推移

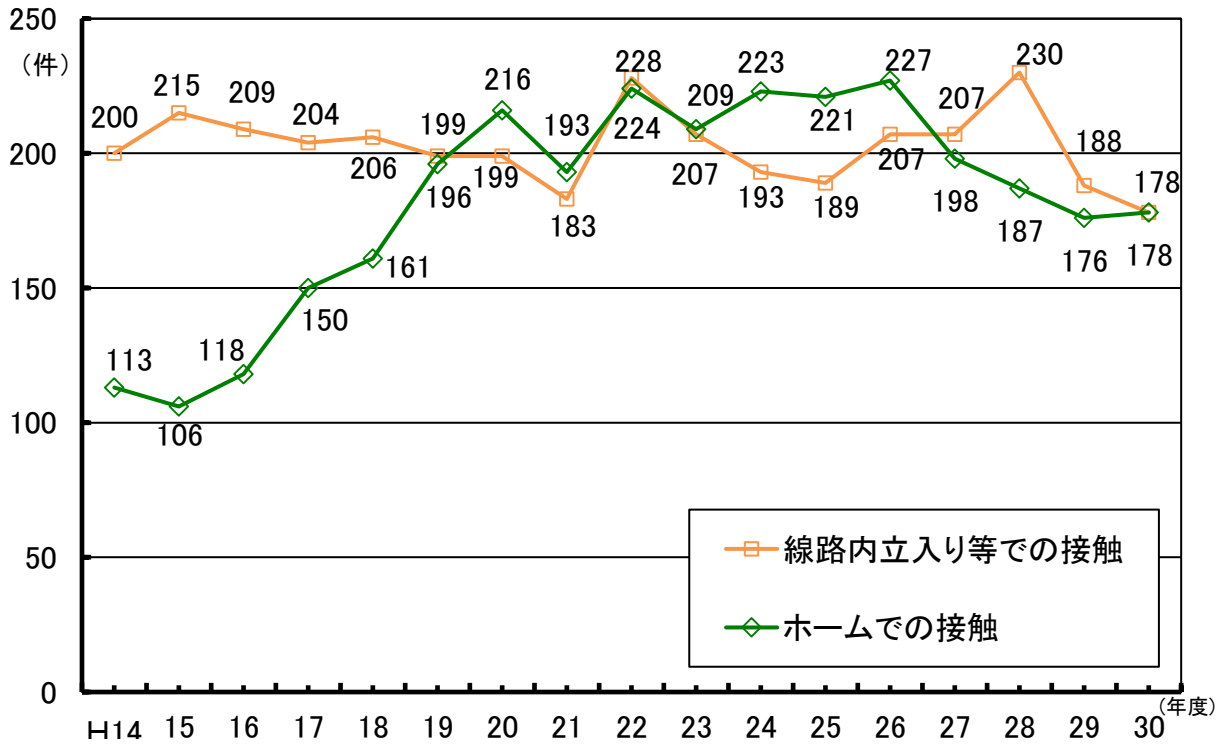
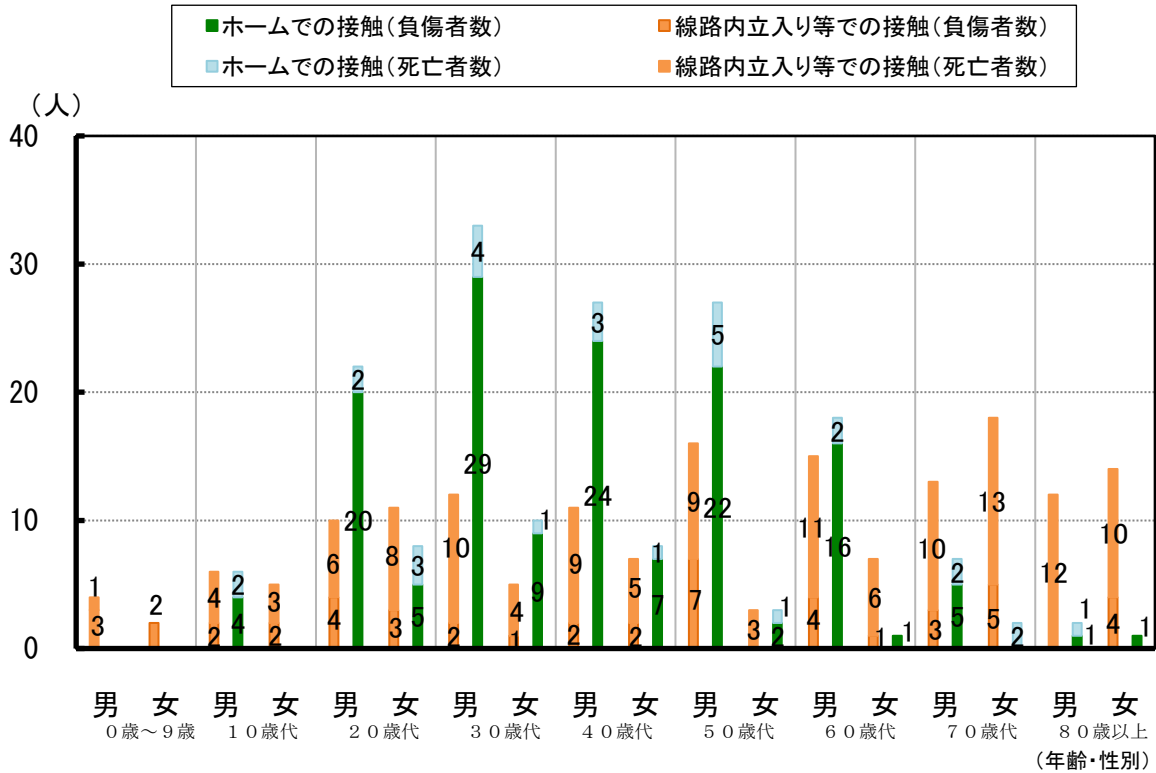


図16: 人身障害事故による死傷者数の年齢別人数(平成30年度)



※ 年齢の把握ができなかった場合は、除いています。

※ 高齢者(65歳以上)については、ホームでの接触による死傷者数は16人、うち死亡者数は6人、線路内立ち入り等での接触による死傷者数は66人、うち死亡者数は51人です。

2.5 事業者区分別の運転事故件数

○事業者区分別の運転事故の件数は、下表のとおりです。

表2:事業者区分別の運転事故件数(平成30年度)

(件)

事業者区分 \ 事故種類	列車衝突	列車脱線	列車火災	踏切障害	道路障害	人身障害	物損	合計
JR(在来線)		1		101		194	3	299
JR(新幹線)						2		2
民鉄等※1		2		120	2	168	3	295
公営						8		8
大手				72		125		197
中小		1		48	2	35	3	89
新交通・モノレール		1						1
路面電車	4	6		7	21	3	1	42
合計	4	9	0	228	23	367	7	638
地域鉄道(再掲)	4	6		49	20	15	2	96
地域鉄道(鉄道)		1		45	2	12	2	62
地域鉄道(軌道)	4	5		4	18	3		34

※1 路面電車を除く

※2 「公営」は、東京都交通局(上野懸垂線、日暮里・舎人ライナー)を含み、東京都交通局(路面電車)及び札幌市交通局は路面電車を除く

※3 「大手」は、西武鉄道山口線を含む

※4 「中小」は、準大手鉄道事業者(新京成電鉄、北大阪急行電鉄、泉北高速鉄道、山陽電気鉄道)を含み、大阪市高速電気軌道は南港ポートタウン線を含む

※5 「地域鉄道」は、12ページの脚注6をご覧ください。